

第 22 回 (1994 年 3 月 19 日放送分)

【いろはがるた】

「亭主の好きな赤烏帽子」: If the husband likes the red headdress for a court noble, even though it is eccentric, his wife can't refuse her husband's choice.

【話の内容】

ハワイの日本人の 4 人のリーダーと言え、相賀安太郎(日布時事社長)、牧野金三郎(ハワイ報知社長)、奥村多喜衛(マキキ教会)、今村恵猛(浄土真宗本願寺派の監督)がハワイ日系コミュニティの精神的なリーダーだったが、今日は相賀さんのことを話す。

ハワイ植民新聞の記事に載っており、「ヒロタイムス」にも転載したが、1910 年、横浜の港でまだ 5 歳であった相賀安太郎の息子重雄が「パパ万歳」と叫んだ。相賀はこの時に「別れては いつ会い見る 病む妻の 上に幸あれ 海三千里」と歌をよんだ。どうして相賀がこのような歌を作ったか。

彼のペンネームは相賀溪芳(そうがけいほう)であった。1896 年(明治 29 年)にハワイに渡った相賀は、戦争中に収容されたサンタフェでの苦しい生活などを記したことで知られる¹。

1909 年の「ハワイ植民新聞」にも書いているが、相賀、牧野、根来源之(ねごろもとゆき・弁護士)、田坂養吉(日布時事記者)がオアフ島のストライキで大苦闘していた時、ヒロの「ハワイ植民新聞」は各プランテーション等、彼らを応援するためにお金を集めて送った。1910 年 3 月 20 日の判決で、4 人はストライキのリーダーと見なされ投獄されてしまった。その時、病気中の相賀の妻は 5 歳の重雄とともに、日本へ帰ることが決まった。サイベリア丸で帰る妻を、相賀も見送りに行った。妻は日本に帰るとすぐ病死し、これが一生の別れとなってしまった。7 月 4 日、4 人のリーダーは 114 日の牢屋生活を終えて解放されたが、その際、あらゆる所から花束が届いた。相賀は 1910 年 8 月 23 日、ホノルル発のてんよう丸で 15 年ぶりに日本へ出発した。投獄中に亡くなった妻の墓参りと息子に会うための旅であった。9 月 2 日に横浜の港に着いたが、相賀氏によれば、多くの友人が歓迎してくれる中に、大阪から妻の母親が息子重雄を連れて迎えに来てくれ、重雄は相賀を見つけると、「パパ万歳」と叫び続けた。それを見た相賀氏は泣いたとのことである。

【曲】

¹ 相賀溪芳 (1948) 『鐵柵生活』 布哇タイムス、相賀安太郎 (1953) 『五十年間のハワイ回顧』 「五十年間のハワイ回顧」 刊行會、などが有名。

「青葉の笛」

【サブジェクトタグ】

日布時事 相賀安太郎 ストライキ